この文章の最初の部分に、すでに布石が打たれている。

「もうすっかり暗くなっている」「ピンの付いた」「羽の裏を見た」「――幼年時代の思い出を強くそそられるものはない――」「もう、結構」「――残念ながら自分でその思い出をけがしてしまった。――」

最後の部分を扱いながら、最初のこれらの布石の部分を扱えば、さらに深く読み取りができると考えた。

とにかく最初から順に読み取っていき、必要ができたら、もどってそこを更に深める。詩の授業にそれが典型的に現れるようであるが、このことに気づかされたことがうれしかった。まさに、授業の構想ということになると思う。

それから布石と布石をとらえ、つなげていくこと、さらに布石（核）を見つけ出して、全ては扱えないにしても、自分の力量に応じて扱ってみることの大切なことも学ぶことができた。それは、教材解釈をいかにするかということにかかわってくる。毎時間、教室めぐりをして、魅力のある授業に出会うのが楽しみになってきた。定年までとにかく、学び続けようと思う。それにしても時は刻々と過ぎていく。

44　英詩 Rainbow の授業に学ぶ（三年生）

十一月八日㈮　吉田章宏先生に三年生で英語の詩の授業をしていただいた。

教科書に埋め草のように何気なくのっているこの詩を、教えていただくようにお願いした。この詩を私は好きにはなれなかった。読んで意味をとれば、十五分もあれば終わるだろうと考えた。あとの残りの時間で、ブレイクの詩を教えてほしいと吉田先生に手紙を書いた。

過密スケジュールの中の時間を取って、吉田先生は、この詩を百回以上も繰り返し読まれて教材研究をされ、A4判七ページにわたり教材研究（教材解釈）を書いて持って来てくださっ

Rainbow

Boats sail on the rivers,
　And ships sail on the seas;
But clouds that sail across the sky,
　Are prettier far than these.

There are bridges on the rivers,
　As pretty as you please;
But the bow that bridges heaven,
　And overtops the trees,
And builds a road from earth to sky,
　Is prettier far than these.

（by Christina Rossetti）

『New Horizon English Course 3』

（P75　東京書籍）

Boats sail on the rivers,
　And ships sail on the seas;
But clouds that sail across the sky
　Are prettier far than these.

た。そのほかに、バッグ一杯に辞書や資料も持って来られた。

「せっかく取り上げるのであるから、この詩人の心を感じとりたい」と考えられて、用意してくださったことに対して敬服した。

一、押韻のこと

頭韻B—A—B—A、脚韻S—S—Seと韻を踏んでいることを教えてもらった。第二連でも、詳しく説明していただいた。気づかないところで、新たにわかったところもたくさんあった。

二、語順のこと

詩の場合には、普通の文章と違って、語順を入れ替えることがあることも教えていただいた。

～prettier far～＝～far prettier～

三、Rainbowのこと

〈日本語で「虹」と言ってしまえば、そのままでは直ちには「雨」を連想するようにはなっていない。漢字の「虹」はなぜ「にじ」なのだろう。この文字の字源の物語があるであろうか。また「虹」はなぜ日本語では「ニジ」と呼ぶのだろう。そんなことが、まず疑問として浮かんでくる。

早速、手元の岩波国語辞典を引いて見ると「虹」にはこんな説明がなされている。《にじ

〔虹〕（太陽と反対側の）雨が止んだ空や大きな滝のあたりに、弓形にかかってみえる七色の美しい像。日光が空気中に浮く水滴で屈折、分散して現れる。「虹の橋」》

広辞苑（第4版）には、次の説明がある。《にじ〔虹・霓〕雨あがりなどに、太陽と反対側の空中に見える七色の円弧状の帯。大気中に浮遊している水滴に日光があたり光の分散を生じたもの。外側に赤、内側に紫色の見える主虹のほかに、その外側に離れて色の順を逆にする副虹が見える。のじ。ぬじ。》

虹にかかわって、「雨」のこと、「弓」、「七色」、「橋」などが、日本人には連想されやすいらしいことが、考えられる。ただ、「虹」の文字そのものには、「雨」も「弓」も全く登場していない。このことは、注目しておきたい。広辞苑を引いたお陰で虹の別字があることを知った。勉強になった。

英語のRainbowという語には、読めばそのまま、Rain（雨）とbow（弓）が含まれていて日本語で言えば、「雨弓」あるいは「弓雨」ともいうような表現の言葉になっているのが、とても面白く感じられる。仮に、この発想で、これを漢字を使って表せば、どうなるだろうか。英語では「雨」と「弓」への連想は、Rainbowという言葉がものに組み込まれていて、この語を見た途端、そうした連想に誘われる仕組みになっていることにも、注目しておきたいと思う。（以下省略）〉

学研の辞典には次のように出ていた。

《〔虹〕 解字 「虫（ヘビ）＋音符工（つらぬく）」の会意兼形声文字。天空を貫く大蛇に見たてた呼び名。

〔霓〕 解字 「雨＋音符兒（小さい）」の会意兼形声文字。倪（小さく低い城のかき）と同系のことば。 意味 昔、にじにも雌雄があると考え、雄を虹、雌を霓・蜺といった。降雨の前兆とされる。》

四、この詩で何を

〈この詩は、人工物に対する自然の美しさを称える詩なのであろう。〉

〈この詩人は、ボートと船に対して雲を、橋に対して虹を、しかも、天と地をつなぐ「道」としての虹を、遙かにpretty「綺麗なもの」、「美しいもの」として、礼讃している。その詩人の心は、素直に受け止めておきたい。第一連は「雲」、第二連は「虹」を取り上げていることは、何か特別な意味があるのであろうか。前者では、ともに海と空を"sail"するものとして「空」を水に譬えている。後者では、ともに「橋」として、水（川）の上に架けられた、岸と岸をつなぐ「橋」として、あるいは地と空／「天」をつなぐ道としての「橋」として、譬えられている。この対比は、動くものと、動かないものとの対比とも考えられるであろうか。このことも、考えてみたい。また、眺められる自然の空から、神話の世界、天国などに通じるHeaven「天」への変貌を、「虹」が促していると読むこともできるだろ

う。そのような変貌を経験する糸口として、この詩を読んでみたい。

授業では、ともかくまず、この詩を繰り返し繰り返し読むところから始めたい。〉

私は吉田先生が、時間がごく限られた中で教材研究をされ、苦闘されていることに対して頭の下がる思いがした。

深い教材解釈をしたうえで、それを授業にいかに結びつけたらよいのか。その先に、まず、どのように教材解釈したらよいのか、私はたくさんのことを教えられた。

五、空(sky)と天(heaven)

「空を横切って飛ぶ雲」のところで使われている across は、もしかしたら cross（十字架）を連想させるように、使われているとも考えられることを気づかせていただいた。さらに、「天国へ橋をかけ、大地と空（天国）をつなぐ道としての虹」は「はるかにきれいだ。」というところで、驚いてしまった。

私はこのような説明を聞いて、自分の浅はかさに気づかされた。sky も heaven も同一のものとして考えていた私は、目を覚まさせられた。

「詩人のこと／言葉を大切にする人、美しく使う人。微妙な言葉のニュアンスに極めて敏感な人。言葉で、物事の感じ方や見方で、新しい発見を表現して、私たちにその新しい発見をさせてくれる人。詩によって、その詩人が発見した、新しい世界に導いてくれて、新しい経験をさせてくれる人。」というお話を伺って、考えさせられてしまった。これは十五分もあれば授業が

終わると考えた私の浅はかな考え方を、否定するものであった。「まいったな」と思った。吉田先生は「この関連して考え得る全てのことを教えるとすれば、十時間は必要であろう。」と書いておられる。

二十四項目にわたって、深く教材解釈をされて、さらに、それをどのように授業へ組み入れていったらよいかと苦闘された授業は、心を引きつける魅力のあるものであった。

六、英語を学ぶということ

吉田先生はあくまでも冬部中学校の職員のために、次のようなことも書いてくださっている。

1 詩を学ぶことによって、「新しい世界」が開かれること。詩人の心、詩人の世界。

2 英語を学ぶことによって、「新しい世界」が開かれること。

3 言葉には歴史があり、その歴史には、物事を捕える人々の心が映されていること。人々の生きた世界の歴史が映されていること。

辞書をよく読むことを薦めること。辞書をskyとheavenについて、一緒に引いてみるのもよいだろう。

4 特に、英語の「詩」を学ぶことによって、英語の言葉の繊細なニュアンスに気づくこと。

5 英語を学ぶことは、国語（日本語）を学ぶことになること。

6 英語を学ぶことは、私たちの心の世界を豊かにしてくれること。

以上のようなことが伝えられれば、一時間としては満足すべきであろう。生徒一人ひとりとの出会いが楽しみになってきた。もはや、時間がなくなった。

あとは、可能な限りの努力をするのみだ。

私はもっと早く吉田先生のこの英語の授業に「出会って」いれば、英語の教師をやめなかったと思う。中学校で英語を教え続けていたに違いない。英語教育の目的が、これほどスッキリと胸に落ちたことは、今までにはなかった。定年一年前で「出会った」ことも、神様のお引き合わせであろうか。

七、私の訳

最後に吉田先生にご指導をいただいて、数回書き直してやっとできた私の訳を書いて、吉田先生のご苦労にむくいたいと思う。

虹

小舟は　川を航(ゆ)き
大舟は　海を航く
繊細な美しさをたたえて。
だが
それにもまして

青空に十字を描いて航く雲には
自然の美しさが　宿っている。

川には橋がかけられている
技術の粋の美しさを集めて。
だが
それにもまして
樹々を越え
地上から大空へ
大地から天国へと
橋わたしをする虹のアーチには
神の創造の美しさが　宿っている。

指導書には、次の訳例が見られる。

小舟は川を走り、
　そして船は海を走る。
でも、空をよぎる雲は

そんなものより美しい。
河には橋がかかっていて、
　橋はとても美しい。
でも、天にかかる虹は、
　木々の梢をまたぎ、
地から空への道となる。
　そんな虹は橋より美しい。

（New Horizon 3　解説編　東京書籍）

今度は、"William Blake"の詩の中から、"To see a World in a Grain of sand／…"この授業を私は受けたいと思っている。昨年、私が授業したら、十五分しかもたなかった。

45　吉田章宏先生の来校をめぐって

――教務主任との激突――

外部講師の来校については、私が前もって設定した日がめまぐるしく変わるのが常だった。

「そんなことないよ。誰がそんなことを言っているか、私にはちゃんとわかる。」
生徒はこんなことを話して、外部講師をむしろ歓迎していることがあった。だが外部講師が入ることを、とにかく毛嫌いする教師もいた。

46　中学生に学問を教える必要があるのか

平成七年十一月二十二日(水)　(三年生)

学問とは
「・一を聞いて十を知ること
・問うことを知ること（同一か差異かわかること）」

When you are told to do a thing, be clever enough to think what will come next.

吉田先生は、このようなことを使って授業をしてくださった。
それ以来、英詩の教材解釈・数学の教材解釈を詳しく書いてきて、三年間、冬部中学校のために足を運んでくださり、指導してくださった。
ある日の研究会で、「中学生に学問を教える必要があるのか。中学校教育と学問、そのねらいと位置づけについて聞きたい」という質問が出された。この背景には、「中学生には学問を教える必要がない」という意見の含まれている質問であった。
司会をしていた私は、これを聞いて唖然とした。そして、このことには、触れないようにした。後日、吉田先生から、次のようなお手紙をちょうだいした。

「教育」と「学問」を分離して考える先生に、教育についてのお考えをゆっくりうかがいたく思っています。「問い」を大切にする教育こそ、子どもを育てることになるのにとたいへん残念に思いました。それは、幼稚園も、小学校も、中学校も、高校も、そして大学も、そして一生を通じて、変わらないのだと思います。中学だけが、「問い」を忘れてよいなどということは、ないと思います。そのことが分からないことが、中学校の教育を貧しくしているのだ、と思います。
『釈迦に説法』に書いて、全職員にこのお手紙の内容を伝達した。